

鴨の流れに…

寺井 善七

河原町の繁華街に行けば、必ず楽しみに立ち寄りたくなる場所がある。それは四条大橋で足を止め、鴨川を覗くことだ。清流にキラキラ魚の影や、釣人の姿を見かけるとほっとして心が和むのである。「こんな都心の川で鮎が釣れるなんて素晴らしい。さすが京都ですね」と、いつか観光客らしい方から話しかけられたことがある。鴨川は平安の昔から、山紫水明の都の象徴として、民衆の暮しぶりを映しながら、悠久と流れ来ている。

終戦直後の初秋、復員してまだ軍服のまま四条大橋を渡った時は、鴨川も、東山も昔のままの生き生きとした姿に感無量だった。大戦で日本の主要都市の殆どが、爆撃を受け罹災したのに、京都は無^{きず}疵だったことで、国敗れて山河ありと生還の喜びをしみじみ噛みしめたものである。

鴨川との関わりは、父が木屋町周辺で生れ育ち、幼い頃から鴨川を庭として、特に魚捕りに夢中だった日々を何度も聞かされていたからだが、また、鴨川が昭和10年6月大雨で氾濫した時は驚いた。叔父の家が高瀬川畔にあって2階に達する程の浸水を受け、四条河原町一帯は救護のポートが漕がれていた。前年は室戸台風が襲い、京都も多数の死傷者が出ただけに、自然の底知れぬ猛威に身震いしたことを覚えている。

この愛着ある鴨川が次第に汚れ出したのは、確か東京オリンピック開催の頃からで、戦後の高度経済成長に伴い、企業は活発に、住民の暮しは所得倍増で豊かになるにつれて、生活排水がそのまま河川に流れ込み、みるみる内に悪臭を放つ下水路に変わり果ててきた。

当時の下水道管の敷設率の低さも相俟^{あい}って日増しに水質汚染に拍車をかけていたようだ。その鴨川が澄んできれいに見られた日があった。昭和40年頃の年末年始の1週間だけ、工場や家庭が正月を迎え、生活排水が少なかった為で、三条大橋を渡りながら、このような鴨川に戻るのは何時の日か、せめてメダカでも泳ぐ川に戻って欲しいと思ったものだ。

その上、空も汚染、騒音等、市民の生活環境を害する報告が次第に高まって来た。市役所前のロダン像等、排気ガスを浴びて白く腐食し無残な姿となっていた。

漸^{ようや}く、昭和45年の国会で公害問題が審議され、関係法が整備されてからは、行政と民間の努力によって順次、良い生活環境に生まれ変わり、現在は鴨川に鯉が泳ぎ、ユリカモメも飛来して住民の憩いの場に戻った。昨年度の大気汚染や、水質汚濁の測定結果も問題ないとの事は真に喜ばしい。

しかし、バブル景気が崩壊して以来、企業も事業縮小で公害も減少しているようだが、最近の景況感から経済は回復基調にあるとか、それが景気浮揚第一、環境第二となって、またぞろ、大気汚染や水質汚濁が心配されるのである。行政も市民も、この愛着ある「鴨川」をバロメーターとして、公害防止に協力し、「歴史都市京都」の生活環境保全に努めて欲しいと願うと共に、昔の京都市歌……「山美わしく、水清く」のと通りの鴨川を、次代に引継ぐ責務があると思っている。